

書評

愛知峰子 著

『樋口一葉 真情をみつめて』

甘露 純 規

過渡期の文学作品の研究は骨が折れる。近代文学史では、創始者としての坪内逍遙や二葉亭四迷の活躍が描かれるが、逍遙や二葉亭が活躍した明治二〇年前後、多くの読者は、逍遙や二葉亭ではなく滝沢馬琴や為永春水の作品を好んで読んでいた。よく指摘されることだが、馬琴や春水の作品は明治二〇年前後の読者にとってまさに「当代の文学」だった。この意味で明治前半期は文学史上の過渡期の一つと言える。こうした明治前半期の文学を研究しようと思えば、近代文学に関する知識はもちろん、それ以前の文学についても学ぶ必要がある。でなければ、新しい時代と古い時代が複雑に混ざり合ったこの時代の文学作品を理解することはできないだろう。

明治前半期の作家の中で樋口一葉は、読解の難しい、かつ最も興味のひかれる作家の一人だ。旧弊な社会と葛藤する女性の内面を描き、森鷗外や幸田露伴から「まこと詩人」として激賞された一葉は、夏目漱石や森鷗外

とともに、近代を代表する作家の一人だ。が、一葉の文学的素養の根幹は、萩の舎での旧派的な和歌指導によって形成された。一葉の作品はこうした前時代からの継承と、同時代の最新の文学的知識が複雑に混ぜ合わされることにより生み出された。とすれば、一葉の作品を真に理解しようと思えば、近代文学という点からその価値をはかるだけではなく、前時代の文学との接続も必要となる。が、こうした前時代との接続から一葉の作品を研究する作業は、すでにいくつかの優れた成果があるものの、十分に進んでいるとは言えない。本書は、一葉の作品の実態をこうした前時代との接続から照らし出したものである。

まず大雑把に本書の内容をまとめておきたい。本書は、一葉の作家としての原点から、文学的模索と転機を辿り、発展の様相を捉えるという流れとなっている。具体的なアプローチとしては、旧派和歌の視点から一葉の作品を

考察、一葉作品の原点には、「真情」をありのままに詠むという旧派の歌論があることを明らかにした。こうした歌論を原点とすることで、一葉は、苦難の道を選びとる主人公の意思や覚悟を描くことに成功した。

詳しく内容を見ていくことにしよう。第一部では、作家一葉の原点として、一葉が学んだ和歌の理論と小説の関連を考察する。一葉が学んだ和歌は御歌所派に近く「古今和歌集」を範とし、題詠中心の旧派であったために、従来あまり取り上げられなかった。その歌論によれば、歌とは「真情」のままに詠むべきで、それが天地鬼神を動かし、歌の道は経国のあり方に通じる。著者は一葉の「真情」描写志向と文学的社會改良志向の淵源の一つを、高崎正風のような御歌所派の歌論に見る。とは言え、これは一葉に限ったことではなく、明治二〇年代の文壇では、文学理論への歌論の転用という現象が見られた。著者は一葉の試みをこうした同時代の状況に位置づけることを忘れてはいない。加えて著者は歌人が言うところの「真情」と作家一葉が目指した「真情」の内実の違い、経国と底辺の人々への慈善につながる意識の違いも見逃していない。著者は、まず処女作「闇桜」を取り上げて、こうした歌論に支えられた創作のあり方を見る。一葉は和歌の題に相当するものを小説の「骨子」とし、

そこに「真情」を表現する手段として筋立を用いた。「闇桜」では恋煩の末に死ぬという非現実的な虚構を通して、思い焦がれる心情という類型的な感情を詠んだ。著者は歌人であった一葉にとってこうした創作法はごく自然な方法であったと考える。しかしこうした創作法は問題もはらむ。伝統和歌では「真情」として類型的感情が詠まれるが、それでは現実世界の複雑な「真情」を描写できない。そのため一葉は「真情」の根本的な見直しを迫られる。

もちろん、これまでも和歌的素養と小説の創作法との関連について研究が行われてきた。従来の研究では、一葉の和歌それ自体を研究するものと、小説との関連から和歌を見るものがある。和歌それ自体についての研究は指導の実態、草稿の整理、歌風の研究といったもので、これらの研究では、一葉の和歌は結局のところ旧派を脱しなかったという評価を与えられる。これらの先行研究に対して、著者は小説に対する和歌の影響を視野に入れ、和歌の作風の変化、歌語の用い方の変化に目を向ける。一方、和歌と小説の関連を見る先行研究では、小説の文章や題名がいかに古歌をふまえているか、文体に和歌の影響が見られるかといった研究が行われてきた。これに対して著者は小説における和歌的素養の具現を先行文学

の取り込みと時代的変容という点から捉え、先行文学の時代に合わせて変容させることにこそ、一葉の作品の特殊性があると主張する。

第二部では、一葉の小説が質的に大きく発展を遂げる際に、大きな役割を果たしたのが、明治二十六年の一〇ヶ月間の「空白」期であることが明らかにされる。一葉には、「雪の日」脱稿から「琴の音」の成稿を得るに至るまで公表された作品の全くない、約一〇ヶ月間にわたる「空白」期が存在する。この「空白」期の後、一葉は堰を切ったように発表を続け、「大つごもり」などの名作を集中的に発表した晩年の「奇蹟の期間」につながっていく。従来、この「奇蹟の期間」の文学的基盤は『文学界』同人との交流、龍泉寺町への転居だけが指摘されてきた。もちろん、「奇蹟の期間」の下地として、この「空白」期における吉原遊郭周辺の下層生活者との交流が一葉の「真情」の模索に大きな影響を与えたことは言うまでもない。が、著者はそれ以外でもこの「空白」期は「奇蹟の期間」の文学的基盤を形成したと主張する。この「空白」期の要因として、従来は体調不良、転居にともなう繁忙が指摘されてきた。著者は日記の記述などから、それだけで「空白」期を説明するのは難しいと指摘する。また発表誌がなくやむを得ず創作を断念した説

も、実際にその期間も原稿の依頼があったことを考えれば従うわけにはいかない。そこで著者は「空白」期の原因を「真情」の描写を求めた故のスランプだと主張する。

「雪の日」で一葉は単なる恋愛を描く以上の成果、「真情」の描写を求めた。著者は、この時期の一葉が作歌でも行き詰まり、詠歌活動も沈滞していたことに注目する。歌人として一葉は、「真情」描写とそれによる人心の感化という旧派和歌の理念に従いながら、内容的・形態的に和歌を刷新しようとしていた。これまで、こうした「空白」期の作家一葉の主體的な動きは看過されてきた。著者は「空白」期における作家一葉の主體的な動きに光をあてる。

著者は、「空白」期と重なる明治二十六年の四ヶ月間の萩の舍離反を、従来言われてきたように、創作意欲の一時的喪失とは考えない。一葉は中島歌子の添削指導から脱して、実景実情を詠むという理念に忠実に、家運の衰退に伴う実感を詠もうとした。この時期を経過して塾に戻った後にも、一葉は独自の歌風を積極的に模索した。一葉にとって小説と和歌は同根と考える著者は一葉が残した詠草から、小説家としての逸材の痕が見られると考える。著者によれば、明治二十七年以後の詠草には、二つの特徴がある。一つは長い詞書付の歌が増加すること、

もう一つはそこに詠み込まれる心情の實質と内容に変化が見られること、である。特に後者の特徴を見れば、世を不定のものと捉える思想が見てとれると言ふ。一葉は、中島歌子から古典的な比喩の技巧は学んだが、それを用いて不定思想や生活の苦惱を詠んだ点で、師とは異なる。こうした師との違いに、著者は、一葉の個人的な体験と周囲の環境の激変を読み取っている。このような歌人としての一葉の姿勢は、文学的感化によって社会に対する道義的責任を果たそうとする旧派歌論の姿勢につながっていく。が、その姿勢は旧派歌論の枠内にとどまり、与謝野鉄幹や正岡子規らの短歌革新とは異なるものだった。

このような師と一葉の關係の変化をふまえて、著者は小説における和歌的表現の変化を指摘する。萩の舎離反前の小説では、歌語や引き歌表現を随所に使用し古典文学的色調が濃厚だが、和歌的表現は雑然としており統一性がなく、表現の印象が乏しい。離反後の小説は、引き歌表現がおさえられ、要所で歌語を一つ取り込み、イメージを暗黙のうちに読者と通い合わせる作品へと変化している。こうした和歌的表現の利用の違いと並行し、離反後は、社会に対する批判の質も変化した。「琴の音」「やみ夜」など、明治二六・二七年頃の作品に見られる不条理な世間への憤りが明治二八年以後の「にぎりえ」・

「わかれ道」では、抵抗のあきらめに變化する。こうした變化を、従来の研究では虐げられた人々の解放を願っていた一葉の根本的な挫折を見た。が、著者はこれを激しい憤りによる抵抗を描いて「真情」を写そうとする姿勢から、世の中に対する冷静な批判が加えられ、理性的に捉えられた「真情」を描く姿勢に變化したからだと分析する。著者によれば、こうした姿勢の變化は同時代の坪内逍遙や『文学界』同人に見られるような、社会への貢献という使命感と齟齬することはない。こうした姿勢の變化は、社会に対する使命感により「真情」を精緻に描く方向に進むという過程でもある。著者はこうした分析から、一葉を明治文壇とは無關係に彗星のように現れた存在として安易に理解するのではなく、文壇と深くかかわった作家として文学史の中で捉え直してみるべきだと提言する。

第三・四部では、第二部を受けて作品の表現が具体的に分析されている。「琴の音」で一葉は、古歌の一節を断片的に文中に引用するのではなく、琴の音をめぐる古歌の情景描写を作中のたたずまいに利用している。題名にも『源氏物語』の五節の君の歌が使われており、金吾がしづの琴の音に引かれて立ち去りがたく思うという筋を暗示している。が、心象風景に和歌の伝統的イメージ

を用いる表現法が、前近代の物語文学の常套手段であったことを著者は忘れていない。しかし一葉にとってこの手法を明確に用いるのは、「琴の音」が最初と言える。加えて著者は、同時代の不良少年の更正事業に対する社会的関心から、文学Ⅱ芸術による精神面への働きかけを描いた点が「琴の音」の新しさだったと評価する。こうした手法の延長線上で、一葉は、古典文学の言葉のイメージを活用した情景描写を基底に置き、明治という新たな時代に生きる人々の姿を「にこりえ」・「十三夜」・「たけくらべ」に書きついでいった。

和歌的な表現が持つ含蓄や象徴性を解明し、作品に対する理解を深めることにより、著者は旧来の解釈の訂正を試みる。たとえば代表作「にこりえ」の先行研究には、丸木橋を渉るの解釈をめぐり、社会改革・現状否認、脱出の志向など変化を目指す変改説、あるいは大望を断念し現状・過去へ逃避する不変説がある。これに対して著者は言葉の伝統的なイメージの検討から対峙説を主張する。和歌の中では、丸木橋には、危うさのある恋、浮世、辛い人生などのイメージが伴う。ここから変改や不変でもなく、浮世に対峙し一步を踏み出すという解釈が生まれる。また一葉は「渡る」「ふみかへす」という言葉が和歌の中で持つ伝統的なイメージを周辺に配して、危う

い恋、浮世、辛い人生といったイメージを醸し出す。加えて丸木橋は『平家物語』の「小宰相身投」など古典文学の連想を可能にし、複雑で豊かなニュアンスを生み出す。そこには、和歌の掛詞の技法による内容の複雑化、本歌取りに見られる、前提となる作品を取り込んだ内容的興行の深化が見られる。これらの技法により醸し出されるイメージは、枕詞や序詞のように、次の展開を暗に予告する。そして、こうした伝統的手法を駆使して、宿命的なものに翻弄される危うさの中で、苦悩と対峙する下層生活者お力の姿が描出されるのだ。

従来「十三夜」についての難問は、離婚を望んだ阿閼の翻意、婚家に戻る阿閼が恋人録之助と再会する筋書きの必然性だった。これに対して著者は和歌的表現を参照することで、これらの問題を解明する。まず基底的イメージとしての「月」は、人の世と対立し、世の無常を思わせる。他にも「涙」のイメージもあり、こうしたイメージが阿閼の苦悩を照らし出す。「十三夜」の月が阿閼の苦悩、秘めた恋など、実像を夢幻能のようにしばしの間に照らし出す趣が働く。月が懐旧の情を誘い、無常を感じさせ、見る人の心を乱れさせるので、阿閼も心あこがれ、半ば衝動的に離婚を決意してしまう。とすれば、翻意は抗議のためでも、絶望のためでもない。阿閼は衝動

的に実像をさらけ出して、内心の苦悩を口にしたが、降り注ぐ月光の中で、母として生きることへと傾斜、運命に對峙する。かつての恋人との再会について言えば、作中の小道具として登場する「薄」には人を招く、忍ぶ恋、恋心の顕現が表象される。これが下の録之助との再会を招く。加えて、古歌でも「薄」は故人への哀傷の思いを表すことから、阿閔が婚家に身を沈める、結婚継続の決意の悲壮さを表すと解釈できる。阿閔の苦悩を象徴しつつ現世を照らす月は、物語の基幹を支える役割を担い、薄の穂は物語の伏線としての機能を果たす。唐突な感じのする恋人との再会も、実は薄の穂を通して上の物語に内包されているのだ。

著者は作品の享受環境にも目配りを忘れない。前述のように、一葉の和歌は「新しさ」という点では評価されなかった。が、そうした「新しい面」だけを評価する立場から見えてこないものもある。同時代の享受の問題がそれだ。一葉の小説が掲載された文学雑誌には、和歌も数多く掲載されており、小説の読者は和歌の読者でもあった。著者はこうした読者にとって古典教養豊かな一葉の小説は親しみやすく、分かりやすかったと指摘する。近代と前近代の混濁は作者の創作法だけでなく、読者による享受においてもまたそうなのである。

著者は、古典文学の素養を駆使しながら新しい時代に生きる人々の「真情」を描く一葉の作品世界を明らかにした。古典文学に関する知見と接続することで生まれる著者の解釈は、先行研究に對して、より深いレベルに到達していると言えよう。かつまた著者の解釈は、萩の舎を中心とする一葉の人間関係をおさえたものであるだけに、非常に説得力に富んでいる。本書は、これまで「近代的な」という点で高い評価を与えられてきた小説が、前近代の歌論を骨格として作り上げられたことを明らかにした点で、一葉研究者ならずとも非常に興味深い。本書は、文学史上の「進歩」とは何かという根源的な問題を、一葉の作品を通して明らかにしてくれる。

もちろん、一葉の文学的素養は和歌によるものだけではない。著者もところどころに取り上げているが、近世文学の影響も看過できない。一葉文学のバックボーンには、半井桃水の指導などを通して得た近世文学的素養も影響していることだろう。説明が待たれる。

△二〇一〇年一〇月刊、おうふう、A5判、三三三頁、

八、四〇〇円（税込）

（かんろ・じゅんき／中京大学准教授）